



Data 2024-33

監督・脚本・音楽：
アレックス・ファン・ヴァーメルダム

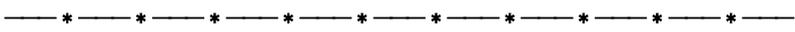
出演：トム・デュイスペレール／フ
リーダ・バーンハード／ハン
ス・ケステイング／アニエッ
ク・フェイファー／ダーク・
ペーリング／マンデラ・ウィ
ーウィー／リチャード・ゴン
ラーグ／ジーン・ベルヴォー
ツ／ピエール・ボクマ

👁️👁️ みどころ

世の中には“あっと驚く”稀有な事例があるが、映画でも“あっと驚く”奇想天外な作品が時々あるものだ。それが“油断禁物ロードショー”と称された、オランダの鬼才アレックス・ファン・ヴァーメルダムによる“事前情報シャットアウト”すべき本作だ。

監督作品 10 作目だから、タイトルが『No. 10』？もしそうだとしたら安易すぎるが、前半の“愛憎の人間ドラマ”と思われた展開から、後半は一転。いきなり、「惑星ルナポーからの使者」だと言われても・・・。

そんな展開に主人公が“あんぐり”なら、私たち観客も“あんぐり”。“大本営発表”も、“フェイクニュース”がテンコ盛りになっている近時の SNS も信用できないけれども、産みの母親からのビデオメッセージなら信用できる・・・？そんな誰も予測できないラストに向かう中、主人公の選択は惑星ルナポーへの帰還？それとも・・・？こりゃ必見！



■□■オランダの鬼才と彼の第 10 回目監督作品に注目！■□■

本作のチラシには「<ボーグマン>の鬼才アレックス・ファン・ヴァーメルダム第 10 回監督作品」、「謎めいた、大混乱・・・。映画自体が地獄のように分裂。オランダの鬼才が、不穏で分類不能な一作を携えて帰って来た。」の文字が躍っているから興味津々！ほぼ同世代である私は、1952 年生まれのアレックス・ファン・ヴァーメルダム監督の名前を全然知らなかったから、なおさら興味津々だ。

さらに、本作のチラシにはアレックス・ファン・ヴァーメルダム監督の次の言葉が記されている。すなわち

人々が神を信じなかったので、司祭は司祭であることをやめた。人々が幸せで、楽園に住

んでいるからだ。だから司祭は人々に、そこは樂園ではなく、死んだ後により良い樂園があると伝える。そしてそこに到達するには、これまでとは違う人生を送らなければならぬと伝えるのだ。

この、わかったようなわからないような文章(?)は一体何を意味するの?

他方、本作は原題が『Nr.10』で、邦題も『No.10』だが、これって一体ナニ?本作は、アレックス・ファン・ヴァーメルダム監督の10作目の監督作品らしいが、まさかそれだけで「No.10」というタイトルにしたの?それはあまりにも容易すぎるから、それはないはずだが・・・。

■□油断禁物ロードショーとは?事前情報シャットアウトとは?■□

上記の文章に続いて、チラシにはストーリーらしきものが紹介されているが、それに続いて、さらに「何も知らないというのは素晴らしいことだ。実際のところ、何も知らないのが一番良いのだ。」という監督の言葉を引用した上で、「本作はこのチラシに記載されたもの以外の情報はすべてシャットアウトして鑑賞すべき映画だ。」と書かれている。私はそのお薦め(?)どおり、チラシ以外に何の事前情報も持たないまま本作を鑑賞したが、それが正解だったかどうか?それは、微妙だ。

さらに「油断禁物ロードショー」なる新造語も!これも一体ナニ?

■□主人公は演出家と舞台俳優。設定は“あれ”にそっくり■□

濱口隆介監督の『ドライブ・マイ・カー』(21年)『シネマ49』12頁)の原作は村上春樹の同名の短編小説だが、映画は179分の長尺になっていた。そこが第74回カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した濱口脚本の素晴らしさだが、私の見立てでは、同作に村上春樹の別の短編小説『セラザード』のストーリーを混在(挿入)させたところがミソだった。そのため同作では、冒頭に見る西島秀俊演じる主人公の舞台演出家とその妻との異様なセックスのあり方(?)が大きなインパクトを与えていた。もっとも、同作は後半から『ドライブ・マイ・カー』というタイトル通りの、車の専属運転手を務める女性と主人公との、北海道に向けてのロードムービーになっていったが・・・。

それと同じように(?)、本作も冒頭、舞台演出家のカール(ハンス・ケスティング)が厳しく舞台役者ギュンター(トム・デュイスペレル)たちを演出する風景が描かれる。本作は、近時の“何でも説明調”の邦画と違って、説明が全くないので、ストーリー展開はよくわからないが、ギュンターが共演している女優イサベル(アニエック・フェイファー)がカールの妻だということがわかり、しかもギュンターとイサベルとの不倫関係が見えてくると、なるほど、なるほど・・・。

しかし、そんなストーリーなら本作は今どきありきたりの不倫ドラマ・・・?いやいや、チラシには「監視下の不貞。それは常に、目を光らせていた。」と書いてあったから、本作は、ここからは、驚く展開になっていくはずだ。

■□■ “愛憎の人間ドラマ” の展開と思いきや・・・？■□■

映画制作においては、黒澤明監督が「黒沢天皇」と呼ばれたように、監督が絶対的な権力者だ。それと同じように、舞台劇でも演出者が絶対的な権力者だから、台本の修正でも役者の配置替えでも、すべて演出家の思うがままに・・・？理論的にはその通りだが、自分の演出する芝居で主役を演じる役者のギュンターが、共演者であり自分の妻でもあるイザベルと不倫関係にあることを知ったカールが、ギュンターのセリフを少なくしたり、台本を変えてみたり、というのは「権力の乱用」にあたる上、カールの心の狭さを周囲に見せてしまうだけなのでは？そんなカールの態度の急変にギュンターが納得できず、怒りに身を震わせたのは当然だ。

他方、そんなギュンターの苦しみを少しでも守ってくれていたのが一人娘のリジー（フリーダ・バーンハード）だが、ある日、リジーから、「私の身体には肺が1つしかないことがわかった。突然変異らしい。お父さんはどうなの？」と質問されたから、さあ大変。そんな事態になれば、慌てて病院に駆け込み、精密検査を受けるのが常識だが、これまで一度も病院に行ったことがないというギュンターはここでも、病院行きをきっぱりと拒否。そこらあたりから「あれれ、このギュンターは何かへん。」と思いはじめることによって・・・。そして一見、舞台演出家とその妻 vs 舞台役者の“三角関係”をテーマにした“愛憎の人間ドラマ”と思われた本作が、後半からは全く想定外な(?)ストーリーに！

■□■ “惑星ルナボーからの使者” だ、と言われても・・・■□■

私は『中国電影大観 5』(『シネマ 54』)の<第2編ジャンル別>では中国映画 17 本を第1章「これぞ中国！戦争映画大作、国威発揚映画大作」

第2章「これぞ中国！心温まる感動作」

第3章「これぞ中国！中国流娯楽大作」

第4章「これぞ中国！中国流問題提起作」

第5章「これぞ中国！中国流アニメ」

に分類した。そして本当は、その「第2章 これぞ中国！心温まる感動作」に入れるべきだったが、実際には<第1編 監督別>の「第1章 第5世代監督」の章に収録した作品が、張芸謀（チャン・イーモウ）監督が総指揮を取った『愛しの故郷（我和我的家乡／My People, My Homeland）』（20年）だった。同作は「愛しの故郷」を統一テーマに、5人の監督がそれぞれの物語（短編）を紡いだものだが、その第2作第2話『空から UFO が！（天上掉下个 UFO）』は、貴州省の田舎町の険しい山の上に突然 UFO が登場するという奇想天外な物語だった。

もともと、同作は「愛しの故郷」という統一テーマに沿ったバカバカしくも美しい恋物語になるほどと納得し、心地よい笑いを誘ったが、本作は「三角関係」を核としたドロドロの愛憎劇に見えた前半から、後半は、突然惑星「ルナボーの使者」だというヴァシンスキー司教（ダーク・バーリング）やイノセンス神父（マンデラ・ウィーウィー）が登場す

るのでビックリ！もっとも観客がこれにびっくりなら、ヴァシンスキー司教、イノセンス神父から「この宇宙船で君は地球に来た」「我々は12人の子供を地球に降ろしたが、11名は行方不明となり、君だけが残っている」と言われたギュンターが、事情が飲み込めない顔をして戸惑ったのは当然だ。

ギュンターが惑星ルナボーからやってきたという証拠は、地球人と違って彼にも肺が1つしかないことだ。それは先日娘のリジーから言われてギュンター自身も驚いたことだが、まさか自分も肺が1つしかないなんて！しかも、自分が地球人ではなくルナボー人だなんて！そんなバカな！しかし、宇宙船の中にある“青の間”で自分の母親だという女性からのビデオメッセージを見せられた上、肺が一つしかないというレッキとした“物証”を見せられるとギュンターは・・・？

■□■ギュンターとリジーの選択は？本作の結末は？■□■

1931年の日中戦争から1945年の太平洋戦争（大東亜戦争）終結まで、日本国民は“大本営発表”なるものに騙され続けてきた。情報収集と情報提供を権力者が一手に握るとそうなるが、他方SNSが発達した今は、国民1人1人がスマホによって情報収集と情報発信の能力を持っているから、“フェイクニュース”なるものが世にはびこる弊害を招いている。

また、今年で弁護士生活50周年を迎えた私も、真実発見の困難さを50年間ずっとかみしめてきたが、いきなり司教と神父から、「君は地球人ではなく、ルナボー人だ」と言われたギュンターが、一瞬何が真実かわからなくなってしまったのは、やむを得ない。産みの母親からのビデオメッセージを見るといかにも本当そうだし、自分には肺が1つしかないという現実を突きつけられると、やはりギュンターの選択は・・・？さらに、父親からそんな稀有な体験談を聞き、自分も直接同行し同じ体験をした娘のリジーの選択は・・・？

本作ラストのハイライトは、ドイツの小さな教会の地下に長年埋め込まれていた宇宙船の地球からの離脱シーンになる。宇宙ステーションから月に向かって打ち上げられる宇宙ロケットや、長距離弾道弾ミサイルのようなスピード感も派手さもないものの、本作に観る巨大な浮遊物（＝宇宙船）が地表を割ってゆっくりと空に飛び立っていくシークエンスは迫力満点だ。もっともその中にギュンターやリジーは乗っているの？そんな、本作の結末はあなた自身の目でしっかりと。

2024（令和6）年5月2日記